

第190回 「元気に百歳」クラブ俳句サロン「道草」開催

今年は早々から「新型コロナウイルス感染症拡大」という恐怖に出遭い、これを凌駕するための決定的な手立てを、私たちは未だ持てないまま喘いでおります。7月には4カ月ぶりに「新橋ばるーん」に集まり、句会を開くことが出来て、大いに喜んでおりましたのに、8月にはまた休会となり、今までにない閉塞感に陥っていたところです。

8月26日、奥田さんから「9月は第二回目の通信句会にします」とのメールをいただき、少しホッとしていましたら、何と！「18名の方が、参加して下さいましたよ」との追いかけメール。俄かに周囲が明るく軽やかになってきました。

二回目の通信句会に参加して下さいました皆さんは、芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、上田枯葉さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、住田幸佳さん、高瀬荻女さん、辻柴楽さん、中島懂岳さん、原晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然の総勢18名です。

住田先生から9月5日に兼題をいただき、私たちは10日までに句を詠んで提出しました。その後、兼題別句一覧表を受け取り、住田先生に15日までに選句結果を送信。本日、選句結果を拝受しました。住田先生、有難うございました。提示いただいた兼題にチャレンジし、下述の結果を得ました。この度の兼題と、私たちが詠み、選句され、天賞と最多得票賞（☆印）に輝いた方々の句を記述いたします。

兼題1. 「秋の雷」

◎『黒き空真二つにして秋の雷』	多佳	天3☆8
◎『灯を消して空の競演秋の雷』	一光	天2
◎『秋の雷名も無き坂の闇転げ』	栄女	天1
◎『天空の血管となり秋の雷』	明峰	天1

兼題2. 「里芋」又は「子芋」

◎『木桶にて里芋ゴロと垢落とし』	懂岳	天2
◎『病食の子芋ほろりとやさしけり』	歌多音	天1
◎『子芋煮る好きだったわねと言いながら』	多佳	天1
◎『菜箸を子芋器用に逃げ回り』	傘吉	☆12

当季雑詠の自由題 (=秋=)

◎『コロナ禍やまだまだ自粛秋暑し』	和感	天2
◎『手水鉢満たす水面に居待ち月』	栄女	天1
◎『言い訳に百薬の長秋深し』	一光	天1
◎『影選りて歩むかたえに秋の風』	月草	天1
◎『宵闇や思わぬ長き立ちばなし』	多佳	天1
◎『絵手紙の秋刀魚今宵の酒の友』	傘吉	☆11

(道人の一句)

秋の雷雲間に転げ落ちるごと 住田道人

兼題1. では、多佳さんの句「黒き空真二つにして秋の雷」が、天賞三つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。暗黒の空を真二つに切り裂いた稲妻のクローズアップが、選者の感動をキャッチしました。スケールの大きな句でした。次に一光さんの句「灯を消して空の競演秋の雷」が、天賞二つを獲得しました。この句も部屋の灯を消して、次々に空に展開される稲妻と雷鳴を、さながら天空のショーとして捉えられました。次に栄女さんの

句「秋の雷名も無き坂の闇転げ」が、天賞一つを獲得しました。雷鳴が轟く坂道、下五で「闇転げ」と表現されたことが、選者の共感を得たと思われます。もう一句、明峰さんの句「天空の血管となり秋の雷」も、天賞一つを獲得しました。本日、表彰句に挙げられた皆さんは、昔から雷光が稲と交わることで、米の収穫を豊かにすると言われ、「秋の雷光」は「稲妻」と呼ばれる「季語の謂れ」を良くご存知で、明峰さんの句は、まさしくその範たる句ではないでしょうか。

兼題2. では、憧岳さんの句「木桶にて里芋ゴロと垢落とし」が、天賞二つを獲得しました。この句は里芋の洗浄シーンを捉えた句ですが、ごろごろと木桶の中で洗われ、濁り水が透明に澄んで、新鮮な里芋が見えてくるようです。次に歌多音さんの句「病食の子芋ほろりとやさしけり」が、天賞一つを獲得しました。実は作者が足を骨折し入院されていたことを、存じ上げませんでした。実感のこもった句になりました。次に多佳さんの句「子芋煮る好きだったわねと言いながら」が、天賞一つを獲得しました。この句が醸し出している秋のセンチメントというか、中七、下五の「好きだったわねと言いながら」から、しっとりとした情緒を感じます。最多得票賞（☆印）句は、傘吉さんの句「菜箸を子芋器用に逃げ回り」に輝きました。煮ころがしの子芋の特性を滑稽に捉えた句が、多くの選者の共感を獲得しました。12票の得票は見事でした。

自由題では、和感さんの句「コロナ禍やまだまだ自粛秋暑し」が、天賞二つを獲得しました。この句は、今日この頃の自粛という閉塞感に縛られる日々を、見事に捉え詠んだ句です。下五の「秋暑し」という季語を見事に働かせました。次に栄女さんの句「手水鉢満たす水面に居待月」が、天賞一つと高得票を獲得しました。ご高承の通り「居待月」とは、十五夜の満月、望月から数えて、次の日は十六夜(いざよい)であり、その次の日が立待月、次が居待月、次が寝待月と、日を経る毎に月の出は遅くなり、月は下の方から欠けていきます、満月の日から三日目の夜の月を「居待月」と言います。手水鉢にその月が映っていた訳ですから、夜は更けていたと思われますし、辺りの静けさも一入でありましたでしょう。次に一光さんの句「言い訳に百葉の長秋深し」が、天賞一つを獲得しました。秋の酒と言えば、牧水に「白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒は静かに飲むべかりけり」がありますが、この句では下五の「秋深し」という季語が、しっかりと働きました。来し方、行く末を想い、静かに飲まれたことでしょうか。次に月草さんの句「影選りて歩むかたえに秋の風」が、天賞一つを獲得しました。残暑厳しい今秋です。そのようなとき、一瞬、秋風がスーッと吹いて来て、涼しい至福のときを感じられたのでしょうか。選者はそこに一票を投じたようです。

多佳さんの句「宵闇や思わぬ長き立ちばなし」が、天賞一つを獲得しました。多佳さんは今回、3句とも天賞に輝きました。お見事です。9月上旬の日暮れの明るさに引きずられ、つい立ち話が長くなってしまったと、慌てるシーンが見えるようです。また自由題句でも傘吉さんは、最多得票賞を獲得されました。傘吉さんの句「絵手紙の秋刀魚今宵の酒の友」が、最多得票賞（☆印）に輝きました。独り酒の夜に、お相手は絵手紙の秋刀魚であり、静けさが一層身にしむ秋の夜です。11票の得票は、理解者の多さを物語っているのでしょうか。

余談ですが、通信句会を開催するようになって、選句のとき、選んだ天賞句には「何故天賞であったか」を書くようになり、住田先生にご面倒をおかけしています。ただ皆さんのお考えが明確になって、新しい勉強の場面が増えていることも間違いありません。

今回は「新橋ばるーん」で10月1日の開催が予定されています。これは是非とも実現したいものです。ではまた、皆さん御機嫌よう。

白然（記）